

論文の内容の要旨

論文題目 ブラカ・L・エッティンガー研究：マトリクスの遭遇の理論と実践
氏名 ガーデナ 香子

本研究は、主体性をどのように理解するべきかという議論に対してひとつのあらたな視点を提示することを目的に、ある個人とその他者とのあいだの関係性をいかにとらえるかという議論に対する貢献をめざしたものである。この貢献を実現するための論理的かつ実践的な基盤として、本論文では精神分析医であり美術家であるブラカ・L・エッティンガー（Bracha L. Ettinger）の業績を選び、彼女のこれまでの功績を理論と実践の交わる多層的な領域において総括し、分析し、応用する。エッティンガーは、ラカン派精神分析理論を出発点に、独自のフェミニスト的な語彙を駆使して、みずからが女性的なものの象徴界と呼ぶ分析モデルの理論化をおこなったことで知られている。この研究においてはこの分析モデルの構成を理解しながら、エッティンガーが言語的テキストから美術作品までさまざまな媒介物をとおして理論を実践に結びつけていることを確認し、そのみぶりのなかに彼女が提案する倫理的な方向性を探すことになる。

エッティンガーは、女性であり、ユダヤ人であり、また外国人であるというみずからの周

縁的なものとしての経験を有意義なもののみならず、この立場からこそ説得力をもって提示できる主体性の理解を打ちだしている。彼女は男性的な比喩に基づいた、一者性をもつ独立したものとしての主体の概念を、現代において主体性を論じるためには不十分なものであるとし、これに女性的な比喩によって理解される主体性の構造を追補することを提唱する。エッティンガーの思想は主体性を、ひとつであるものとしてではなく、いくつかあるものが占める領域のあいだでおこる遭遇の経験によって定義するものである。彼女はこうした遭遇を、マトリクス (matrix) と呼ばれる、妊娠後期から出産後の期間における母親と子の関係に基づいて理論化されたモデルによって理解する。本論文はエッティンガーによるマトリクスのモデルをもとに「マトリクスの遭遇 (matrixial encounter)」と名づけることのできる経験を理論化し、またこの経験が視覚美術や文学などさまざまな対象についてどのような効果をもたらすかを探求する。また、これをとおして、個人と他者とのあいだの関係性をマトリクスの遭遇の理論においてとらえることにより、倫理性についてのあらたな理解がしめされるという仮説を証明する。つまり、本論文は、革新的な理論を形成してきたエッティンガーの業績を総括的に研究することによって、あらたな倫理性のモデルが獲得されるという可能性を、マトリクスの遭遇の理論に基づいて論証しようとするものである。

本論文は三部構成をとっている。「ブラカ・L・エッティンガーのポジション」と題した第一部では、精神分析と美学の学位をもち、分析医として開業しながら美術作品の制作をおこない、さらに出身国であるイスラエルや生活の拠点としているフランスだけでなく、イギリスや北欧、ロシアや中国などさまざまな地域をまたにかけて移動しながら大学や高等教育機関で分析理論を教えるエッティンガーの多彩な活動を、精神分析理論における貢献、フェミニスト美術界における貢献、そして流浪する語り手としての貢献として3つの切り口からまとめる。第一章においては、精神分析理論家としてのエッティンガーの業績を、彼女が出发点としているジャック・ラカンの後期のセミナーに対する批評を参照しながら確認する。このなかで、本論文の理論的礎であるマトリクスとメトラモーフォシスのモデルを紹介する。さらに、フロイトの「無気味なもの」についての論文をエッティンガーが読みなおした文献を分析しながら、精神分析理論における彼女の介入がどのよう

な点で独自のものであったのかを確認する。第二章では、フェミニスト美術家としてのエッティンガーの業績を検討する。ここでは、20世紀後半のフェミニスト美術をとりまいていた状況を、タリア・グマ＝パターソンとパトリシア・マシューズによる議論や、グリセルダ・ポロックとロジリカ・パーカーによる分析を参照しながらまとめたうえで、そうした時代背景においてエッティンガーがどのように位置づけられるのかを論じる。第三章では、エッティンガーがみずから意識的に置いているとみられる流浪する語り手としての地平を観察することで、彼女がさまざまな活動領域におけるみずからの役割、立場、そして責任をどのように認識しているのかをあきらかにする。ここでは、多層的な構成をもつヘブライ語のシステムと、エッティンガーがそこから取りだそうとする、意味の形成のあらたなモデルを紹介し、これをエッティンガーが流浪する語り手のみぶりの本質に置いているようすをしめす。さらに、このモデルをマトリクス的な領域に位置するものだと理解し、他者とのあいだにこのような多層的で分散的な意味形成の経験をおくことにより、トラウマの再散布を可能とする倫理的な遭遇に到達することができるというエッティンガーの主張を、ホロコーストのトラウマと、エッティンガーが「共-証言 (wit(h)nessing)」と名づける作用との関係において論じながら検討する。

第二部は、「ブラカ・L・エッティンガーの美術作品と制作言語」についてまとめるものである。第四章では、初期のドローイング作品やインスタレーション作品のモチーフとして多用された、ギリシャ文字のオメガ (Ω) のモチーフについて議論する。ここでは、おもに初期のドローイングの作品を中心に、その画面のなかや、フレームが構成するかたちとしてあらわれるオメガの記号に込められる女性性の比喩についてあきらかにする。第五章では、エッティンガーの代表作である《エウリディケ (Eurydice)》シリーズなどでもちいられている、複写機を使用した絵画制作について論じる。フォトコピックと呼ばれるこの制作方法においては、コピー機のトナーと、多層に重ねて塗りこまれ、また剥がされる油絵の具とが織りなすざらざらとした質感の作品表面上に、複写機にかけられたオリジナルの画像がみえかくれする。ここでは、エッティンガーが絵画のもつこうした作用を有益なツールとして設定し、そこに絵画のもちうる倫理性をしめすさまを論証する。第六章では、主体性を遭遇というモチーフにおいて理解するエッティンガーが、実際に他者とのあいだでおこなわれた遭遇をもとに作品化する過程を観察することで、経験としての遭

遇が理論としての遭遇へと置きかえられていくようすを追跡する。ここでは、マトリクス的な遭遇のモデルをテキスト化したインタビューのなかに求めるエッティンガーの正当性を確認するために、まず、エッティンガーのものではない数点のインタビューテキストを分析し、そこにマトリクス的な遭遇の領域が認められることを論証する。そのあとで、エッティンガーがフェリックス・ガタリとエマニュエル・レヴィナスのふたりの理論家、思想家とのあいだの会話を採録し、それを記録記事としてではなく作品として作りあげ、発表するようすを確認し、その根拠と効果をあきらかにする。

「マトリクス的な遭遇のモデルの応用」と題した第三部においては、第一部、第二部をとおして確認してきたエッティンガーの理論モデルを、ほかの作家や美術家によるテキストの読解に応用し、これをとおして、マトリクス的な読解が、これらのテキストに描かれる

「私」と「非-私」との関係性にかんして倫理的な指針をしめすことができることを証明する。第七章では、理論的なフェミニスト美術の流れにおいて多大な影響力をしめしてきたメアリー・ケリーの作品を対象に、ケリーみずからラカン批判を受けついで言語で理論的裏づけをしてきた作品を、同じようにラカン批判に基づいていながらもそこに大幅に拡張されたモデルを展開したエッティンガーのモデルとの照合をとおして読みなおす。ここではおもに《ポスト-パートムドキュメント (Post-Partum Document)》について論じながら、ある時点、ある空間においては「私」と一体であった「非-私」が、「私」の統制下におかれぬ場所へと移行していくことに接することで引きおこされる不安定な状況が、肯定的で創造的なものとして立ちあがってくるようすを観察する。第八章では、マルグリット・デュラスの小説『夏の雨 (La Pluie d'été)』を対象に、読者がテキストとのあいだにマトリクス的な領域を構成し、そのなかでテキストを理解しないこと、あるいは理解できないものとして理解することをとおして、メトラモーフォシスを展開していくさまを観察する。この観察をとおし、理解の不在という、伝統的な理論においては否定的な状態としてとらえられてきた状況を、マトリクス的な遭遇においてその理解しえない他者とのあいだに倫理的なつながりをつくることと同じ立場をしめすものだと位置づける。

本論文はしたがって、ブラカ・L・エッティンガーがヨーロッパを中心とするさまざまな

場所ですさまざまな媒体をとおして残してきた痕跡を掬おうとする試みである。さらに、この試みをとおして、本論文はエッティンガーという他者とのあいだに、メトラモーフォシスを展開しようとするものでもある。ただし、エッティンガーについて論じることにおいては、記述されることが、その記述により固定されることを逃れようとして、つねに逃避しつづけようとしているのだということをまず認識しなければならない。この逃避するものを意味形成的だととらえることこそエッティンガーのマトリクスおよびメトラモーフォシスのモデルの根底にあるものだからである。本論文も、エッティンガーがみずからの活動のあらゆる面において実践しようとしているメトラモーフォシスの一部として、その軌跡の一部を経験しようとしたものなのである。